

第5回 大橋川改修事業に係る環境モニタリング協議会 議事録

日 時 :平成25年1月11日(金)14:00~16:00
場 所 : 島根県民会館 大会議室

■開会挨拶

開催にあたり、国土交通省出雲河川事務所長より挨拶。

■委員紹介

協議会委員の紹介。(委員紹介は、出席者名簿および席次表により各委員の紹介とした)。

■会長あいさつ

- 本日で5回目、今年度は2回目の環境モニタリング協議会となる。皆様方の知恵をいただきながら事業を進めているので、事業は順調に進みつつあると聞いている。
- これまでの内容について、あるいは今後の方向性について説明があると思うが、大橋川、ひいては宍道湖並びに中海の固有水系がきちんとしたものとなるようにしたいので、様々な角度からの議論をお願いしたい。

■大橋川全体の位置関係について

※説明資料：参考資料

事務局より、本日議題の3地区の大橋川全体における位置関係の説明。

■竹矢地区の環境保全措置について

※説明資料：資料-1

事務局より竹矢地区の環境保全措置について説明。

【道上会長】

- 資料-1・P4について、当初の計画である2割護岸から5分護岸へ変更した趣旨を説明していただきたい。

【事務局】

- ◆2割から5分へと変更することで、コアマモやヨシの生育する水深帯をできるだけ多く、広くとることができる。4~7m程度のヨシ、コアマモの生育に適切な水深帯の幅を確保する。
- ◆当地区は、現状も急な護岸があり、その前面にヨシ帯、コアマモが生えているという状況である。できるだけ現状に沿った形でセットバックするという趣旨で2割を5分に変更している。

【道上会長】

- 変更計画の断面図に、3割勾配の断面が描かれているが、これは護岸を作るわけではなく切るだけで、断面積を広げ流下能力を確保するためのものか。

【事務局】

- ◆そのとおりです。

【倉田 学識委員】

- 資料-1・P11の工事の手順だが、具体的に何年というスケジュールを教えてください。
- せっかくこのように段階的に施工することを計画しておられるので、その時々で確認が必要だと思うが、どの段階、スケジュールで調査をしながら次のステップに進むの

かという見通しはどうか。

【事務局】

- ◆工事手順について、矢田の渡しから下流については昭和50年代に既に入収が済み、今年、文化財調査を一部行っている。来年も下流側で文化財調査を行う。矢田の渡しより上流側については、今、用地買収を進めており、その進捗等によって何年といいにくい部分もあるが、この全体の区間を大体4年程度で順次護岸整備を行い、その後、状況を見ながら慎重に河床掘削を考えていきたい。
- ◆モニタリングについて、寄州部分については、随時工事が終わったところから写真による観測等で繁茂状況を確認している。今後も随時工事が終わったところから生育場を確保し移植を行えばその状況を目視での確認を定期的に行い、モニタリング協議会等で報告をしたいと思っている。コアマモについても活着状況を確認して、随時その結果は報告する。工事が終わったところから移植個体が随時どのような動態をしているか追跡確認していきたい。

【道上会長】

- 今言われたように、その都度調査をし、その結果をモニタリング協議会で報告していただくと同時に、専門家の方とコンタクトを取りながら次の工事に進めていくことをお願いしたい。

■福富地区の環境保全措置について

※説明資料：資料－2

事務局より福富地区の環境保全措置について説明。

【道上会長】

- 資料－2・P4に現況護岸があるが、この現況護岸の高さでは、整備計画の流量が流れないのか。

【事務局】

- ◆背後地盤がH.W.Lに比べ50～70cm程度低くなっている。低い部分に盛り、築堤をするという予定である。

【道上会長】

- 現況護岸では現在の整備計画の流量が流れないということか。

【事務局】

- ◆はい、現状の護岸ではあふれてしまう。

【道上会長】

- では図に描かれているのはどの流量に対応しようとしているのか。

【事務局】

- ◆斐伊川水系の基本方針は水系の規模から150年に1回の洪水にも耐えられるという形でH.W.Lの高さが設定されている。図では護岸のパラペットを除いた部分の高さになる。基本方針の洪水を安全に流すためには、堤防護岸に加え掘削をしなければならぬ。ただ、当面概ね20年間で整備をする工事を実施後に、斐伊川水系に戦後最大の洪水被害をもたらした昭和47年7月洪水と同等の規模の洪水が発生しても家屋の浸水被害を防止するということを目指している。その場合、この区間では築堤護岸を完了しておれば掘削はしなくてもこのH.W.Lの中で治まるということで、堤防そのものは最終形と同じものをつくるということである。

【中村 学識委員】

- 保全措置において、動物はヒトハリザトウムシとカワザンショウガイを対象としているが、この2つは希少種だから保全対象種としているのか。

【事務局】

- ◆はい、環境アセスに準じた形で行った環境調査で、この種については保全対象種としている。

【中村 学識委員】

- カワザンショウガイは希少種となっているが今回の調査でも多くいることがわかっている。ヒトハリザトウムシも、残すというのは非常に大事なこと。だが、水産の方からいうと、対象がこれだけであってはならないような気がする。ほかの魚介類や、希少種ではないが大事な生物を工事で減らしてはいけない。たとえば護岸工事で、今回は魚礁ブロックで行うことになっているが、個々に行うときには、漁協や専門家と相談して、これまでの魚礁ブロックだけでなく、様々な方法を検討してもらいたい。動物の保全措置は難しいと思うが、細かい配慮をお願いしたい。

【事務局】

- ◆この環境モニタリング協議会につきましては、平成20年2月に作成した大橋川環境調査最終とりまとめに基づき保全措置を説明させていただいているが、大橋川そのものが中海と宍道湖をつなぐ水系として貴重な生物資源であるヤマトシジミをはじめとする貝類や魚類の生育場となっていることも十分承知している。基本的には、改修で生態系そのもの全体に影響を及ぼさず、水産資源に対しても優しい河川整備を考えていきたいと思っている。
- ◆実際に護岸の素材、構造については失敗事例も多い。漁師の方々の知見も聞きながら、相談しながらというのはおっしゃるとおりである。この環境の委員会をまとめるときにも、水産資源に係る課題は漁協等と別の場で議論するというお話もいただいている。その考え方に変わりはなく、しっかり漁協等と相談しながらできるだけいいものを作っていきたいと思っている。

【中村 学識委員】

- あえて申し上げた。よろしく申し上げます。

【道上会長】

- こういう護岸が生物にとって有効だと今の我々の知見で考えられる範囲をやろうとしているわけだが、やってみれば違うと思う。今考えているのは、机上の上ではいいであろうということ。それは理解できる。実際にやってみれば当然違ってくると思うので、そこを柔軟に考えていって議論してほしい。

【國井 学識委員】

- 私は大橋川改修が始まる前から、大橋川左岸のオオクグ群落に注目しており、工事で失われたら大変なことになると思っていたが、今日の説明では現況の植生が保全されることとなっており、非常に喜んでいる。
- ここのオオクグ群落は日本で一番面積の広い群落ではなかろうかと思っている。宮城、福島県にも広いところがあったが、おととしの大震災で壊滅的な打撃を受け、湿地帯が失われてきつつあるところで、ますます大橋川の河口域のオオクグ群落は貴重な存在になっている。オオクグに限らずここの北の水田や休耕田にもヒメシロアサザやミズアオイといった絶滅危惧植物が生えている。ここは国交省だけでなく、島根県、松江にも心に留めておいていただきたい。

【越川 学識委員】

- この福富地区について、非常に多くの魚介類が産卵する場所であり、州が保全される計画で非常によかったと思っている。
- 先ほどの中村委員と同じようなことだが、ここは汽水環境であり、ザトウムシも水際に多い。クロベンケイガニなんかは、一頃に比べればずいぶん減ってきている。このカニは産卵すれば魚介類のエサにもなるし、それ自体も動物の死骸を掃除してくれる、汽水を非常に意識させてくれる。こういうのを指標として大事にしてほしい。魚礁ブロックも効果の薄いものも結構あるようで、そういったことを確かめながら、汽

水を実感できるような護岸工事をしてほしいと思っている。

【道上会長】

- ここが汽水環境として非常に恵まれた状態にある。ここに近いようなところで、その見本になるよう、ここも一つのモデルになって様々なところに波及していくと非常に良いのではと思う。

■追子地区における環境保全措置の経過報告について

※説明資料：資料－3

事務局より追子地区における環境保全措置の経過報告について説明。

【大谷 学識委員】

- オオクグを2カ所に移植して、1カ月後に北側が水没して結果的にあまりよくなかったということだが、オオクグが水没したのが悪かったのか、あるいは場所が中海に近く宍道湖に比べやや濃い塩分が入ってきたことが悪かったのか。
- 北側に少し高い部分があるのか、あればそういったところで検証してみてもいいのではないか。

【事務局】

- ◆北側、南側ともに基本的にはT. P. +0.6mという高さに基盤を整え前側にバームを作り波浪の影響を受けないような形にしたが、整えた基盤が少し低かったということ、水はけがうまくできなかつたというところで差が出ていると思っている。
- ◆御指摘のとおり周辺で実験的にもう少し高さに幅を持たせ、知見を増やしていくという事も必要だと思う。

【國井 学識委員】

- オオクグは、垂直に切った場合には非常に狭い範囲にしか生えていない。センチ単位の微妙な水位差で育成したりしなかったりする。この場合もおそらくまったく同じ深さでなかったせいだと思う。
- コアマモについて、揖屋承水路には私がアドバイスして移植をしてもらった。もともとは資料－3・P10の意東海岸に移植予定だったが、ここはコアマモが生えているが大きく成長しない場所なので、意東海岸にも近く、多くのコアマモが見られた揖屋の承水路に移植した。私も観察したが、年によっては水温が30度を超えるなど、コアマモの生育に悪い水温になってしまったり、あるいは、糸状藻類が夏から秋にかけて大繁茂し、その被陰によって枯れることがあり、非常に不安定な場所であった。また、ここは淡水の影響もかなり受け、安定的にコアマモが生えるような場所ではない。大橋川内に移植先があれば、わざわざ遠くへ持っていく中で移植するのが最善ではないかと思っている。

【大谷 学識委員】

- ヨシについて、うまくいかなかったのは場所的に西風が強く当たるとか波の影響等何が今回うまくいかなかったか、考えがあればお聞かせください。

【事務局】

- ◆うまくいっていないという認識ではない。移植の時期が工事の関係上冬季の時期で、枯れている状態で移植した。ひと夏超えて栄養をためて来年以降は様々なところから新しい芽が出てきて広がっていくのではと思っている。

【越川 学識委員】

- ヨシは常時水中のところに生えているのですか。

【事務局】

- ◆7分の1、8分の1という勾配を持たせ、陸域から水域にかけて植えている。先端部分は平水位よりも低くほぼ水中になる部分。ほかは、平水位よりも高く、基本的には

陸地に出ていることが多いところである。

【越川 学識委員】

- 水中だとすごいと思ったが。非常にエビ等が多いので、来年水につかった部分がどうなるか楽しみにしている。

【意東 行政委員】

- これからもちゃんと移植して今までどおりの形になればいいのかなと思っております。

【道上会長】

- 期待しているところはたくさんあるので、また次回先生方とご議論願えればありがたい。

【事務局】

- ◆今回の協議会で提示した資料については、協議会終了後、速やかに出雲河川事務所のホームページで公開する。
- ◆次回の協議会については7月上旬を目途に開催予定である。一般の方々へは、日程が決まり次第、事務所ホームページで情報提供させていただく。